

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4 → 6 ・ 4 5 通信

発行人：平賀徹夫
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

今年の3月11日に、大船渡ベースのベース長に就任した菅原圭一さんから、「絆」と題する「世界聖体大会」での講演とその様子を、ご紹介いただきました。3月11日当日、福島原発の事故により、故郷に帰れない浪江町の人々が住んでいる宮代仮設住宅集会所で、松木町教会の「愛の支援グループ」の方々を中心に、「東日本大震災犠牲者追悼と復興を願う集い」として「献茶式」の厳粛な儀式がささげられました。最後にご紹介する記事は、「いのちの光 3.15 フクシマ」です。3月13日の「講演とシンポジウム」、15日の原町教会でのミサで締めくくられた催しでした。

「世界聖体大会にて」－「絆」をテーマに

カトリック大船渡教会

菅原 圭一

このたび、1月24日から31日まで、フィリピンのセブ島で開催された第51回世界聖体大会に「証言者」として招かれ、東日本大震災後にカトリック大船渡教会に起こった大きな出来事について発表する機会をいただきました。世界聖体大会は、4年に一度、世界各地で開催されているカトリックの大会です。

今回の大会への日本公式巡礼団は、札幌教区の勝谷太治司教様を団長、那覇教区の押川壽夫司教様を副団長とし、全国各地から参加した、神父様6名を含む一行32名でした。そのうち、大船渡教会からはエドガル神父様、教会委員会代表の熊谷雅也さん、フィリピン出身の貝山ハイディさん、そして私の4名が参加し、1月27日成田空港で、そして現地で合流しました。快適な空の旅の後、セブの空港には、大船渡教会の元主任司祭のハルノコー神父様が出迎えてくださいました。久しぶりにお会いでき、とてもなつかしく、お元気そうで安心しました。

セブの空港に着いた時から私はVIPの待遇を受け、私の名前を書いた紙を持った方々に出迎えられ、私のお世話をしてくださる神学生の方が付いてくださり、他の参加者とは別的高级ホテルが用意されており、私専用の移動のためのバスがあって、至れり尽くせりでたいへん恐縮しました。

私の発表は1月28日、大会の5日目。世界73カ国から参加した15,000人を超える大勢の聴衆の方々の前で、「絆」をテーマに英語で行いました。私の発表は、フィリピンで非常に有名で人気のあるルイス・アントニオ・タグレ枢機卿様の直後でした。枢機卿様のお話が予定より長くなり、休憩を取らずにすぐに私の出番でしたので、会場がざわついていました。自己紹介と大船渡の紹介、東日本大震災があったことを話した後、あの津波の映像を流しました。会場の皆さんは、街が破壊されていくその映像に驚き、嘆きの声をあげ、食い入るように見始めました。そしてそのあとは、私のスピーチをよく聞いてくださいました。



多くの方の前で「証言」する菅原さん

想像していたよりはるかに大勢の方々の前であったにもかかわらず、不思議とあまり緊張しませんでした。日本人男性と結婚し、家庭を守るために教会に来ることが出来なかったフィリピン出身の女性たちが、震災をきっかけに教会に来るようになったこと、そして日本人信者と次第に仲良くなっていったこと、子どもたちが大勢いて、震災前には長い間なかった洗礼式や初聖体式が行われるようになったこと、聖書朗読を日本語でしてくれていること、「主の祈り」を日本語で歌った後、「アマナミン」をタガログ語でいっしょに歌っていること、代表者を選び、教会委員会に出席していっしょに教会を運営していることなどを紹介しました。

会場の皆さんは、その話に喜んでくださり、感動してくださり、涙を流している方も大勢いて、何度も何度も会場から温かい拍手をいただきました。被災地にある小さな大船渡教会が、世界中の方々から応援していただいていると感じました。新しい信者との「絆」、そして被災地を支援してくださっている全世界の人々との「絆」の実現は、きっと神様のご計画のひとつだったのでしょう、と締めくくりました。

この世界聖体大会でのスピーチは、一生忘れることのない貴重な体験、そして大きな思い出となりました。神様に感謝！



東日本大震災犠牲者追悼と復興を願う集い 宮代仮設集会所で献茶式

カトリック松木町教会 鈴木教弘

3月11日(金)、福島市・宮代仮設住宅(浪江町民)集会所で、東日本大震災5年にあたり犠牲者追悼と復興を願う集いを行った。

この日は、グレゴリアンのミサ曲が低く流れる中、茶道の儀式である献茶式をもって茶を献じた。2万人に及ぶ犠牲者の方々、避難先で亡くなった関連死の方々、中でも福島県は原発事故避難の関連死で2千人を超えるの方々、特に宮代仮設では、ふる里に帰る日を待ちわびながら果たせず無念の思いで亡くなられた5名の方々のため、ご冥福を祈りつつ捧げた。

献茶式は、仮設集会所に祭壇を設け、「敬天愛人」の軸（ノートルダム修道院 故シスターアンナ斉藤宗苑筆）を掛け、奉書紙を七重に折り立て、東日本大震災関連物故者様と宮代仮設の5名の方のお名前を記した。



献茶式は、茶道各流のお家元が神社やお寺で茶を捧げられるように厳粛な儀式である。松木町教会「愛の支援グループ」は、支援者の皆様と共に、避難所から仮設住宅へと支援と寄り添いを続けている。その原点は、「ふれあい茶の湯ボランティア」で一服の抹茶である。日頃は、初釜以外は、点て出しの抹茶で和み、話が盛り上がっている。今回、宮代仮設で献茶式を初めて催したが、ご遺族も参列され、喜んでいただき、皆様からも献茶式参列は初めての経験で、共に捧げることができて感動しましたとの言葉もいただいた。

この集いには、大阪、東京、神奈川、千葉からもご参加いただき、感謝であった。式のあと、カリタスジャパン事務局長田所功様、野田町教会エメ神父様、CTVC 金山重之様のご挨拶をいただき、午後2時46分に黙とうをささげた。



その後は、いつものようにお菓子（希望を現した薯蕷饅頭）と抹茶で、この5年の歳月の思いを新たにした。福島の場合は、原発事故の傷跡は深く、長く尾を引く。家族の分断、心無い中傷、避難解除にも若い人が戻ることに躊躇せざるをえない事実など。

大震災、原発事故の被災者は、それぞれ事情が異なり、苦しさも比較できない。人の見方は様々であるが、私たちにできるのは、身近に苦しんでいる人に寄り添うことである。

福島県民、特に福島市民は自分も避難していたかもしれないというその思いが、仮設の人の苦しみに重なるのである。福島原発廃炉に40年、帰還困難区域、除染されない山野、ふるさとの喪失感は重い。神さまのいつくしみを限りなく頂いている私たちが、先の見えない苦しみを担っている隣人と共に歩むことによって、少しでも神さまにいつくしみを分かち合うことになるのではないかと考えている。

献茶式を通して、心引き締まる中でお互いの絆を深められたのではないと思う。

そして、この原発事故の膨大な犠牲を教訓として生かし、風化させてはならないはずである。なぜなら、日本各地の身近に原発が存在するからである。



私たちは少数派ではない

「いのちの光 3.15 フクシマ」実行委員 勝冶 美喜子

2016年3月で、東京電力福島第一原発の爆破事故から、丸5年が過ぎました。6年目に足を踏み入れたわけです。しかし、5年目だ、6年目だと言っても、いったい何が解決の糸口になっているのかさえ思い出せないでいるのが現状ではないでしょうか。むしろ、年月が経つにつれて見えにくくなり、問題の根本が何にあるのか、解決しなければならない課題は何か、ぼやけてきているのではないのでしょうか。私たちの「眼」が悪くなったのでしょうか？

第3回「いのちの光 3.15 フクシマ」は、このように事の本質から遠ざけられ、不安を抱えている人の声を聴き、共に考えていこうということから、3月13日に、福島駅側にある「コラッセふくしま」で開催しました。



「ふくしま共同診療所」の布施幸彦医師から、お話を伺いました。土日も診療するということについて、子どもたちや除染作業に当たっている人が受診しやすいようにという計らいからだそうです。定期的に仮設住宅へ出向き、健康相談に応じて、どんな小さな不安にも真摯に応えようとする姿勢が伺えました。そして、この地

にあっては、引き続き「避難、保養、医療」が必要であると強調されました。

放射能に関するシンポジウムでは、毎日福島から米沢まで子どもたちをバスで運び、少しでも安心できる自然環境の中で保育を続けている「青空保育たけの子」の代表辺見妙子さんの報告。富岡町出身の渡辺徳仁さんは、放射能のために失ってしまったさまざまなことへの怒りの拳を振り下ろせないでいる苦悩。除染作業に携わっている阿部司土さんは、ただ単に作業をするのではなく、そこに住んでいた人、動物に思いを寄せながら作業をしていることなど、普通では知り得ることのできない貴重な報告ばかりでした。

15日は、原発の最も近くにあり、巡礼地となっている原町教会（南相馬市）でミサが執り行われました。仙台教区の平賀徹夫司教様の司式のもと、大倉一美神父様、狩神正義父様のもとへ、全国から約70名の方々が参加し、祈りとともに原発への思いを新たにしました。



もし、丸5年という経過に意味を持たせるならば、私たちはようやく渦の中から抜け出して、少し冷静になって周囲を見渡せるようになってきたことだと思います。

「真実を知りたい」「汚れた大地をもとの状態に戻して」「もう原発に依存しない世の中にしよう」という声、動きは、段々と大きくなっているのに、そのような声は、ニュースになりやすく、「復興再生」の声にかき消されそうです。

私たちは、少数派なのではないでしょうか？ はっきり言います。否ですと。